慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	對馬島誌(對馬教育會編)
Sub Title	
Author	武田, 勝藏(Takeda, Katsuzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1928
Jtitle	史学 Vol.7, No.3 (1928. 11) ,p.146(458)- 146(458)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19281100-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

我等西洋史の研究に從事するものが常に不便を感じつゝあるは本邦に於て史料たる原本はもちろん刊行書册すらも容易に入手し難いことの多いことである。之は洵に已を得ざる所であるがせめて、その史料集、代表的名著論文の如きものなりとも邦文として提供し、一般讀者をしてその理論的方面よりも寧ろ本邦に缺けたる實際的具體的の知識――これが歴史に缺くべからざる必須物である――に親しましめんことは、斯學の健全なる普及のために望ましい處である。余も亦今後本誌の上に於てこの方面にも微力を致したい所存であるが、土橋君の如き專門學者の手によつて試みられた邦譯正文は、我等史學の立場から利用すべき資料としても大に歡迎さるべきである。今後版を改むるに從ひ、その後に出でたる諸國の憲法正文をも譯述收錄して、この種の著述に乏しい本邦學界のために寄與すると共に、本書をして愈々他の追隨を許さざる完璧の書たらしめんことを望んでやまない。（間崎万里）

對馬島誌（對馬教育會編）

對馬は西疆の一孤島ではあるが、我が本土と大陸との連鎖地に當るので、萬葉に『百船のはつる對馬』と詠ぜられた程、半島往來の船は勿論、遣隋遣唐兩使船も亦多く假泊した。從つて外來文化の影響を享けた事も少くなかつたが、又刀伊賊、元寇の如き國難襲來の事も多かつた。遠く天智天皇の世には國防第一線として金田城が築かれ、又防人烽火の制が設けられ、降つて明治には竹敷要港對馬警備隊の設置せられた。

島内は、土地極めて峻嶮で、殆んど岩石より成つて、往時には諸鑛石の産出も多く、天武天皇の世には銀を貢し、又文武天皇の世には金を貢して、大寶の建元の事さへあつた。然しこの地勢は自ら島民をして半島は勿論、遠く大陸の東南岸までも交易を促し、其の間まゝ、掠奪も敢行せられて、倭寇或は八幡船の勇者を史上に殘した。

島主宗氏は入島以來數百年、よく治島して明治維新に至り、其の間德川時代には朝鮮貿易と信使來聘との兩事あつて、後者の苦心は想像以上であつた。又藩儒の中、外交、藩治に盡力した者としては雨森芳洲、松浦儀右衞門、陶山庄右衞門、等が人に知られてゐる。

現今の對馬は、總て往事に反し、年々歲々衰微の狀を呈し居るのは何故か、實に嘆ずべきである。

從來對馬には、鄕土史（又は史）と稱すべきものは少く平山桑の藩命を以て編述せし津島紀事位である。これも文化年間の編述にかゝつて、今日では補訂すべき處が多い。それ故同地教育會は數年前より本誌の編纂に從事し、本夏、愈よ、この上梓を見るに至つた、實に學界の爲め欣賀すべきである。

本誌は二編に大別され、前編は全島の要述で、後編は町村別の詳述で、對馬の往時、或は現時を知らむとする者の、最良の參考書たるは云ふまでもない。

最後に、本誌の編述に從事せられた日野清三郎氏等に、滿腔の敬意を表して擱筆する（昭和三、八、十五武田勝藏）